

## ■ バニーエルザはショタの催眠肉便器 5日目

……依頼五日目。

第三者が介入するという予想外の辱めを受けたエルザ。

しかし反撃の機会もなく、今日も部屋に連れ込まれて肉便器として調教されようとしていた。

【いやー、昨日はスゴかったねエルザさん】

「っ……」

【で、一つ提案なんだけど】

調教前に、少年が話を切り出す。

【ちょっとしたゲームしない？】

「断る。どうせ……」

【エルザさんが勝てば解放してあげるよ】

「……何……？」

——少年の提案。それはエルザ解放を賭けたゲームであった。

【だってエルザさん弱すぎるじゃん？ ちょっと何かしたらすぐアへるし】

（言わせておけば……！）

【だからチャンスをあげようかなって】

言うや少年は契約書を持ち出す。

契約書には術式が書き込まれており、これにサインをすればエルザも少年も契約に従わなければならない。

【ルールは簡単だよ。今日一日、エルザさんが一回もイカなければ肉便器契約を破棄、この屋敷から解放される。これだけ】

「……ふざけたゲームだな」

【あ、我慢できる自信ない？ だよー、もう触っただけでイキまくりだし】

「そ、そういう意味ではない！」

認めたくない事実を指摘され、紅潮しながら契約書に目を通す。

（……ウソではない、ようだが……また何か企んでいるのか？ しかし……）

少年は圧倒的な精力と性戯から来る自信、余裕があるからこそ、このゲームを持ちかけたのだろう。

【こうでもしないと、愉しめないんだよねー。一方的すぎるとつまらないからさ】

何か裏があるようにしか思えないが……エルザとしては、この挑発に乗るしかない。

「……いいだろう。このゲームを仕掛けたことを、すぐに後悔させてやる……！」

（今日一日……！ 一日だけ、イカされなければいいんだ……！）

毅然とした態度で睨み付けると、サインを終える。

【……じゃ、始めよっか♪】

少年は不敵に笑った後、エルザに聞こえるかどうかという小さな声で何かを呟いた……

『性欲が緩やかに上昇していく』

『絶頂封印』

【じゃ、最初は身体をほぐすためにマッサージからだね】

イカなければ解放。そんなゲームを仕掛けるのだから、イカせるのには自信があるのだろう。

確実に勝利するために今までよりも激しい責めがくると思いきや、始まったのはただのマッサージだ。

【どう？ 気持ち良い？】

「……ああ……」

（今のところ、ただマッサージしているだけか。随分と余裕だな……）

責められても困るが、腹が立つほど舐め切った緩さだ。

（このまま続けてくれればいいのだがな。……っ！）

と、そこで少年の手付きが変化。少しずつ尻に触れるようになり……しばらく続けた後、いつものように尻を鷲掴みする。

（き、きた……っ♥）

本格的なセクハラが始まる。と思えたが、すぐにその手が離れていく。

「っ?!」

【あれ、どうかしたエルザさん？ もしかして期待してた？】

「そうではない……気味が悪くて警戒しているだけだ……！」

【じゃあ期待に応じて、もっと気持ち良いマッサージしてあげるね〜♪】

こちらの言葉を無視し、少年が道具を用意。取り出したのは三日目にも使用したマッサージ用のパイプだ。

【お尻と腰回りの肉をほぐすよ〜♪】

淫具じみたものを使い、今度こそ責めが開始されるかと思えた。  
しかしマッサージャーが押し当てられるのは、またも性感帯ではなく通常の部位だ。  
【気持ち良い？ ほぐして欲しいところがあったら遠慮なく言ってね】

「あ、ああ……」

(……何なんだ……焦らしているつもりか……?)

**ヴヴヴヴ……ッ!**

【いくらエルザさんでも、この辺とかコリがあると思うんだけど、どう?】

「まあ……そうかも、しれんな……」

本当にシンプルなマッサージ。それが数分続き、流石に警戒心が薄れてくる。

(午前は焦らずだけ……なのか……? それなら、いいのだが……)

心地よい時間が長引き、眠気に襲われてうっとりとした目付きになる。

その瞬間を見計らっていたように、少年が股間に震動を押し当てた。

【おっと手が滑った〜♪】

**ヴヴヴヴッ▼**

「んんんんっ♥」

【ごめんごめん、手が滑っただけだから♪】

言いながらもパイプを股間に当て続けてくる。やっ和本格的に責めを始めるようだ。

(くっ……気が抜けていたか? だが、これくらいの刺激……っ♥)

解放がかかっていることを思い出し、精神を整える。快感を得てはいるが、この程度であればしばらくは耐えられる刺激だ。

【なんか股間に食い込んで離れないなあ〜? エルザさん大丈夫? これくらいで変になったりしないよね?】

「っ……っ♥」

このゲームで重要なのはペースを乱されないことだ。少年に対し返答せず、無言のまま耐え続ける。  
ただ、肉体はどうしても反応していく。ほんの少しずつ、じんわりとはあるが、陰唇が熱を帯びる。  
僅かだが牝孔が開きかけ、愛液がバニースーツに沁みていく。

「……っ♥」

(まずい……少しずつ、身体が、熱く……♥ いや、大丈夫だ……まだ……この程度……♥)

少しずつ感じていく肉体。それでも、この程度であればしばらく耐えられる。

……そう思っていたエルザだが、不意に刺激が変化。パイプ震動が最大にまで強くされ、股間に与えられる震動愛撫が数倍に強化される。

(何だ? 一気に……)

**ヴヴヴヴヴッ▼**

「んんんんんんっ♥」

急激な変化に、即座には反応できない。牝の花弁がまた少し開かされ、中から少量だが牝蜜がトプリと零れ出る。

【あれえ? ただマッサージしてたら事故ってるだけなんだけどなあ? もしかしてエルザさんイッチャウの? こんなので?】

「っ♥」

(イカない♥ イッてはならないっ♥ まだゲームは始まったばかりなんだ♥ それも、こんな……こんな責めでええ♥)

**ヴヴヴヴッ▼**

「んおっ♥♥」

そして更に震動が強化。少年がより強く押し当ててきたのだ。

長時間刻まれた快楽がついに御しきれなくなり、腰が思わず跳ね上がる。一瞬だが陰核が無防備に晒されることになり……

【おっとまた手が滑ったあ♪】

**ヴヴヴヴヴヴッ▼**

「おっ♥ お……んんんん~~~~っ♥♥」

(くっ♥ クリがつ♥ クリがああっ♥♥)

特に敏感な部位に震動が押しつけられる。

しかも少年によって尻肉を押しえつけられ、エルザと少年が体重をかけて押し当てている状態だ。

単純ながら非常に強い刺激。陰核の裏側が余すことなく愛撫され、桃色の熱を発するとそこから全身に伝播。

エルザは幾度となく感じた……そして今だけは感じてはならない感覚。絶頂の予感に包まれる。

「おっ♥ お♥ んんんおおおおおお……♥♥」

(ダメだ♥♥ 今は♥♥ 今だけはイッてはあっ♥♥)

**ヴヴヴヴヴヴッ▼**

「おほおおっ♥♥」

(だ♥♥ ダメだ……♥♥ イク……っ♥♥)

何があっても屈してはならない。……はずなのだが、もうどうしようもない。

容易くイカされる惨めさに包まれながらも、抗えない絶頂を心のどこかで待ち侘びる。

そして絶頂が来ると思われた、その時。

「イッ……♥♥ ……………っっ?!」

突然、絶頂感が消え去った。

少年が刺激を中断したわけではない。快感がなくなったわけではない。

にも関わらず、絶頂には至らなかったのだ。

【……おっと、これは流石に耐えたか】

少年も今ので絶頂すると思っていたらしい。だがエルザが絶頂しなかった……つまり耐えたと思い、パイプを離す。

「は…………っ♥ はあっ…………♥」

(……耐え、きった……のか……?)

確実に来ると思われ、否応なくではあるが受け入れた絶頂感。

それが唐突になくなり、エルザは快楽に打ち勝った喜びよりも奇妙な喪失感を抱いてしまう。

【そろそろかなと思ったんだけど……なかなか粘るねー、流石はエルザさん】

ここで少年は一旦責めを中断。次の陵辱の準備をするため、休憩を挟むことになる。

「は…………っ♥ はあ…………。耐えた、のか……」

(……そうだ、私は快楽に耐え切ったのだ。このまま、何としてでも耐え続けてみせる……!)

何にせよ、目的は達成できた。エルザは呼吸を整え、再び訪れる陵辱に備える……

◆

【お待たせ〜、じゃあ早速始めよっか♪】

現れた少年の手には、先程も使われたハンディマッサージャー。そしてイボや突起があしらわれた極太パイプだ。

エルザの両手は後ろで縛られており、抵抗できない状態でこの淫具を使い責めるのだろう。

【今回はガチでイカセにかかるから、せいぜい我慢するとこ見せて愉しませてね♪】

「いいだろう……もっとも、今度も私には効かんがな……!」

言いつつ、エルザは極太パイプに目を奪われる。

それは少年の巨根を模したかのようなサイズで、更に様々なパーツが付いている。

完全に女哭かせの凶悪性具。女としては本能的に、あれを捻じ込まれたら、と思わずにはいられない。

【このパイプ気になる? でもまだだよ、最初はこのマッサージャーからだからね〜♪】

あざとくエルザの視線を拾い、なじりながらマッサージャーを近付ける。

また性感帯である陰核に当てる……そう思わせ、淫具が上昇。下腹部を通り過ぎ、へソに突き立てられる。

「っ……!」

【意外だけど、へソも性感帯らしいんだよね。せっかくだからエルザさんで実験させてもらうね♪】

「……………」

(不意を突かれたが、こんなものが気持ちいいのか? 今回も私の……)

「っ?!」

予想外すぎる部位への責めに、肩透かしをくらう。しかし直後、今度は耳が刺激される。

極太パイプに付いた突起の一つ、小さなブラシ。それを分離して震動させ、耳を優しく柔らかく愛撫してくる。

【耳が性感帯ってのは有名だよな。へソとどっちが効いたか、後で聞かせてもらうからね〜♪】

「……気になるのであれば今、答えておこう……! どちらも私には効かん……!」

かくして、ゲーム第二ラウンドが開始された……

—————

—————……………

「く、ふ…………っ♥ んっ…………♥ ……………っ♥」

【どう? そろそろイキたくなっただんじゃない?】

十分以上かけ、じつくりと責めが続けられている。

流石にへソだけ責めてくることはなく、マッサージャーは時たま胸、乳首、下腹部に移動し、不規則に性感を与えてくる。

ただし極太パイプはほとんど動かさず……たまに見せ付けてきたり挿れるかと思えば、本体は何もせず分離パーツのブラシで耳をくすぐるだけだ。

それでも少しずつ快感は溜まる。乳首はパニースーツの上からでも分かるほど屹立し、陰核も硬くなってきている。

【さて、そろそろお待ちかね……パイプの威力を味わってもらおうよ〜】

改めて極太の張り型を見せられ、思わずゴクリと喉が鳴る。パニースーツの股間部がズラされ、湿った陰部が外気に晒される。

秘裂に少年が宛がい……

(っ……来る……!)

ずっぶ…………♥

「うっ…………っ♥」

(や、やはり……♥ これは……効く……っ♥)

ゆっくりと挿入される。ただ低速で押し進める。それだけでも効果は相当。  
肉壁がみるみると押し広げられ、更にイボが的確にツボを突く。確実な効果をもたらしながら、より奥へ奥へと進み……

**(ま、まだ入る……っ♥)**

**ごづんっ♥**

**「んおっ♥」**

先端が、まだ少年しか辿り着いたことのない最奥部……子宮口にまで届く。そのサイズ、圧迫感は少年のものに勝るとも劣らない。  
また、挿入されたことで今までの愛撫に無駄がなかったことも知る。

最奥を叩かれ、下腹部が火照ったのだが……今までマッサージャーでの刺激がじんわりと溜まっていたのがここで効いてきたのだ。

**【お、子宮に当たったね。感触はどう？】**

**「大したこと、ないな……♥ お前のモノと、同じだ……うっ♥」**

**【いいね、そうこなくちゃ♪】**

一拍置き、ゆっくりと前後。ただ動かすだけでもゴリゴリと肉壁が抉られ、極太の形を教え込まされていく。

**「お……♥ お♥ おおおっ……♥」**

想像以上の快感。いや、破壊力と言った方が適切だろうか。

強引に女体を屈服させ、牝としての具合をこの極太仕様に変えてしまう。

恐ろしいまでに計算された構造であり、その辺の女性などはこの時点で容易く落ちるか発狂を強いられるだろう。

鍛え上げられた肉体と精神を持つエルザだからこそ耐えられているが……

それでも丹念に愛撫され続け、牝となった今、気を抜けばいつ果ててもおかしくない。

**(大丈夫だ……♥ まだ……♥ まだ、耐えられる……♥)**

**【実際のところ、かなり効いてると思うけど……もちろん これだけじゃないよ】**

先程まで耳を責めていた、ブラシ付きの小さな突起。

分離されていたそれが本体の極太パイプに戻され、陰核の下に潜り込む位置にセットされる。

**(あ、あれで……♥ クリの裏側を責めるつもりか……♥)**

**【オマンコとクリの同時責め、いくよ～♪】**

**ずぶっ♥ じゅぶ♥ ずりっ♥**

**「おうっ♥ か……はああっ♥」**

**(中と同時に♥ クリ裏がっ♥ 擦れて……っ♥)**

ブラシ状のものが陰核に触れるのは初めての刺激であり、更に膣内と陰核の同時責めも経験が浅い。

ほぼ未知の体験を受け、エルザは反射的に首を反らせる。

**【お一効いてる効いてる♪ でもここから更に～？】**

効能を確認し、勝ち誇った顔で少年がスイッチを押す。もちろん震動スイッチだ。

先端で子宮口、突起で陰核を押し当てたままの状態、極太パイプが激しく震える。

**(来るっ♥ 耐える♥ 耐え……)**

**ヴヴヴヴヴッ♥**

**「くほおおうっ♥♥」**

牝芯を揺るがす衝撃に、屈辱と歓喜の叫びと共に仰け反る。

ピストンとは違う動きは本能的に対処し難く、ある意味では少年に犯されるよりも強い性感が刻み込まれる。

**「くほっ♥ お♥ おっつふううっ♥」**

**(中とクリが♥ 同時に♥ 同時にいい♥♥ ダメだっ♥♥ イッ……ッッ♥)**

**「ッッ?!」**

抗えない快樂責めに、ついに絶頂してしまうと思われたエルザ。

しかし、またも絶頂感が消失。達することなくゲームは続行される。

**(た……♥ 耐えられた……のか……♥)**

**【今日のエルザさんがんばるね～、いつまで耐えられるかな？】**

**ヴヴッ♥ ヴヴヴヴッ♥**

**「ふうっ♥ んむんんんっ♥」**

震動するパイプで膣肉をかき回される。これも小さくではあるが絶頂しておかしくない快感を与えてくれる。

しかし、エルザの肉体は快樂を溜め込み、発熱こそすれ、絶頂にまでは至らない。

**(い……イカない♥ いや、イケなくなっている……?)**

エルザの望みはともかく、客観的に快樂の強さを考えれば絶頂するはずだった。だが、なぜか分からないがイカなかった。

いや、イカないというよりは、イクことができない、という感じだ。

**(私の身体が……♥ 快樂に適応したとも言うのか……っ♥ 勝てるとはいえ♥ こ、これでは♥ 生殺しではないか……っ♥)**

少年に責められ、身体が適応したということなのか。

ゲーム勝利には有効に働くが、これではイクにイケない快樂の苦悶に苛まされてしまう。

**(いや、これでいいんだっ♥ これしきの苦痛っ♥ 私はいつだって♥ 耐え♥ 耐え……っ♥)**

身体を右へ左へと振り、どうにか絶頂相当の快樂を凌ぐ。

一方、少年はこの時点で勝利すると見込んでいたようで、少し表情に変化が見られた。

【このへんでイクと思ってたんだけどなあ……まあいいや。まだパイプの威力は上げられるからね！】

(ひいっ♥ これ以上はあっ♥♥♥)

**ヴヴヴヴヴヴ**

「んおおおおおん♥♥」

内心で訴えたエルザだが、少年は容赦なくスイッチを操作。

パイプの強さが一段階上がり、より強く激しく膣壁、子宮、陰核を責め立てる。

(まっ♥ まずい♥ これはっ♥ これはあああっ♥)

既に思考は回らない。与えられる刺激が危険な域の快樂だということだけ認識し、再びエルザは絶頂感に包まれ——

(イク♥♥ イク♥♥ 極太パイプにイカされるううっ♥♥)

——しかし、そこでまた快樂の頂が遠のいていく。

「ツツツ……………っ?!」

どう考えても耐えられるはずはない。それほどの快樂なのだが……エルザの予想を上回って快樂耐性がついたということなのか。

(たっ♥♥ 耐えている♥♥ しかしっ♥♥)

耐えられるのはいいが、自力で快樂を制御できているわけではない。これでは絶頂地獄が快樂地獄に変わっただけだ。

敗北するのはまた別種の恐怖に覆われ、心が折れぬよう自身を鼓舞する。

(勝てるっ♥♥ 勝てるんだっ♥♥ だからっ♥♥)

【まだイカないかー。エルザさん本気だねー……じゃあこっちも最大でいくよ！】

少年はエルザが普通に耐えたのだと思っているようだ。スイッチが操作され、ついに震動レベルが最大にまで上げられる。

(今度こそ♥♥ 今度こそイカされ……♥♥)

耐えなければならぬ。しかし、心のどこかでは、絶頂を期待する中——

**ヴヴヴヴヴヴ** **ヴヴヴヴヴヴ**

「んわあっ♥♥ んおおおおおん♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！